

平成30年度申請

キャップストーンプログラム

「自己点検評価説明書」

(「地域公共政策士」資格制度)

プログラム名 キャップストーンプログラム

実施機関名 京都府立大学 公共政策学研究科

序章

プログラム概要（運営・実施体制）

プログラム名	キャップストーン		
対応資格	地域公共政策士		
EQF レベル	レベル7		
構成科目数	1	取得ポイント数	8
社会的認証期間	2012年4月～2019年3月末日		

実施機関名	京都府立大学 公共政策学研究科		
実施部門			
プログラム実施責任者（代表者）	中島正雄		
プログラム担当者	青山公三		
事務担当者	松本慶子		
事務担当者連絡先	電話番号：075-703-5169	Email：松本 慶子 <k-matsumoto31@mail.pref.kyoto.jp>	
備考			

更新する資格教育プログラムの修了者数

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
修了者数	6名	9名	6名	1名	5名	5名	2名

院生 2名 院生 6名 院生 5名 院生 0名 院生 1名 院生 4名 院生 1名
 社会人 4名 社会人 3名 社会人 1名 社会人 1名 社会人 4名 社会人 1名 社会人 1名

*この場合の「社会人」は社会人院生のことではなく、京都府からの研修生や一般公募である。社会人院生は「院生」に含まれる。

更新する資格教育プログラム科目の開講表

科目名	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目
	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
1 キャップストーン	○	○	○	△	○	○	○
2							

当該年度に科目を開講した。 ○

*△は正規の院生からの履修申し込みがなく、正式の授業としては不開講であったが、京都府からの研修事業としての「大学ゼミ協働事業」への参加者と、前年度のキャップストーン参加者（M2）1名、合計2名の参加があったので、京都府立大学の京都政策研究センターがキャップストーンの前身であった「地域協働オープンワークショップ」として開講した。

キャップストーンフィールドの実施概要報告

	実施概要	実施科目	様式1-5の添付資料番号
1	<p>2012年</p> <p>洛北地域（高野川・賀茂川に囲まれた地域）におけるコミュニティバスの可能性と自転車利用促進のための方策</p> <p>① 実施フィールド：洛北地域</p> <p>② 実施時期：2012年4月～2013年2月</p> <p>③ 参加学習者数：6名（うち社会人4名）</p> <p>④ 政策提言：コミュニティバスの運行提案 自転車ネットワークの整備 駐輪環境整備 自転車利用促進（レンタサイクルシステム）</p>	キャップストーン	.1
2	<p>2013年</p> <p>テーマ1：宮津市における北前船港町・城下町まちづくり</p> <p>① 実施フィールド：宮津市</p> <p>② 実施時期：2013年4月～2014年2月</p> <p>③ 参加学習者数：4名（うち社会人2名、院生のうち1名は龍谷大学からの大学院単位互換制度で受講）</p> <p>④ 政策提言：海辺に広場を―青い海を生かす街に 自然を最大限生かしたまちづくり</p>	キャップストーン	2

	<p>2013年つづき</p> <p>テーマ2: 北山文化環境ゾーンを活用した地域活性化対策</p> <p>① 実施フィールド: 北山地域 (賀茂川・高野川に囲まれたエリア)</p> <p>② 実施時期: 2013年4月～2014年2月</p> <p>③ 参加学習者数: 5名 (うち社会人1名)</p> <p>④ 政策提言: コミュニティサイクルプロジェクト 北山街活性化プロジェクト 総合資料館跡地利用プロジェクト</p>	<p>キャップストーン</p>	
3	<p>2014年</p> <p>府立総合資料館移転後の跡地利用方策と地域の活性化</p> <p>① 実施フィールド: 府立総合資料館移転後の跡地</p> <p>② 実施時期: 2014年4月～2015年3月</p> <p>③ 参加学習者数: 6名 (うち1名社会人)</p> <p>④ 政策提言: World Food Museum 北山ライブラリー 北山交流公園</p>	<p>キャップストーン</p>	3
4	<p>2015年</p> <p>大山崎町の歴史遺産を活用した観光振興の提案と観光による商業振興と町の活性化</p> <p>① 実施フィールド: 大山崎町</p> <p>② 実施時期: 2015年4月～2016年2月</p> <p>③ 参加学習者数: 1名 (社会人1名で、キャップストーンの授業としては成立せず)</p> <p>④ 政策提言: 光を活用した街づくり 大山崎町ツアーイベント 大山崎町のお土産商品づくり</p>	<p>地域協働オープンワークショップ (正規の院生からの履修申し込みがなく、正式の授業としては不開講であったが、京都府からの研修事業としての「大学ゼミ協働事業」への参加者と、前年度のキャップストーン参加者 (M2) 1名、合計2名の参加があったので、京都府立大学の京都政策研究センターがキャップストーンの前身であった「地域協働オープンワークショップ」として開講した。</p>	4
5	<p>2016年</p> <p>若者パワーを活用した「地域まるごとブランド戦略」による地域活性化～京都府伊根町における若者100人会議を軸とした戦略づくり～</p> <p>① 実施フィールド: 伊根町</p> <p>② 実施期間: 2016年4月～2017年2月</p> <p>③ 参加学習者数: 5名 (うち4名 社会人)</p>	<p>キャップストーン</p>	5

	④ 政策提案：23のプロジェクト提案		
6	2017年 京都市商店街縁結び事業 京都七条中央サービス会の活性化 ① 実施フィールド：京都市下京区七条中央サービス会 ② 実施期間：2017年4月～2018年2月 ③ 参加学習者数：5名（うち社会人1名） ④ 政策提案：魅力アップアイデア帖 7つの活性化プロジェクト提案	キャップストーン	6
7	2018年 城陽市における産業支援サイトの作成 ① 実施フィールド：城陽市 ② 実施期間：2018年4月～2019年2月 ③ 参加学習者数：2名（うち1名社会人） ④ 政策提案：数値解析手法による企業・団体ヒアリングの体系的関連分析とウェブサイト制作への提案	キャップストーン	7

※キャップストーンとして実施された教育概要について、①実施フィールド、②実施時期、③参加学習者数、④政策提言等の内容を踏まえて概要を1つずつ説明して下さい。

※キャップストーンで作成された政策提言等の活動内容がわかるものがありましたら資料を添付して下さい。

※表の行が不足する場合は、改行して行を加えて下さい。

軽微な変更の申請状況

	申請日	申請の種別	概要
例	2012年4月1日	科目担当の変更	◇◇科目の担当者を〇〇から××に変更した。
1			
2			
3			
4			
5			

※表の行が不足する場合は、改行して行を加えて下さい。

※申請の種別は、科目担当の変更、科目名の変更、科目内容の変更、科目の追加・削除、プログラム名の変更、ポイント配当の比重変更から選択して記載して下さい。

教育プログラムの特徴

資格教育プログラムの概要

公共政策学研究科の「キャップストーン」は博士前期課程のカリキュラムにおいては4単位、地域公共政策士育成のための教育訓練プログラムにおいては8ポイントの科目となっている。

毎年度1～2のテーマを、地域との対話も行いながら設定を行っている。下記に述べるACTRなどの学内研究費を活用する場合には、市町村や団体から地域課題解決のための研究要望が出されるため、その要望に沿って、研究費の獲得を目指している。現在の担当教員は青山名誉教授が担当している。

この「キャップストーン」の授業は、履修者である院生以外に、NPO 団体職員、京都府職員、京都地域未来創造センター研究員など、多様な人々が参加し、ワークショップ形式で進めている。

成果としての提言については、毎年、クライアントの自治体首長、職員、商店街の構成メンバー、地域の市民団体などに報告し、意見などを聞いている。

特色ある取り組み（自由記述）

本学での取り組みにおける主な特色は以下の通りである。

- 京都府立大学の地域貢献型特別研究（ACTR）を活用しフィールドワークやアンケート町等にかかる費用を捻出できている。ACTR はもともと、地域からの研究要請に府立大学がどう応えていくかというところで始まったものである。過去7年間で、2012年（洛北地域コミュニティバス）、2013年（北山文化環境ゾーン活性化）、2015年（大山崎町）、2018年（城陽市）の4件はいずれも地元の要請に基づき、ACTRの研究費を獲得し、アンケート調査や、先進事例調査、現地ヒアリング調査などに活用できている。またACTR以外にも、2016年には公立大学法人の地域課題研究費を獲得して伊根町の調査、ワークショップ、先進事例調査などを行った。さらに、2017年は、京都市商店街振興課の依頼で、七条中央サービス会の調査等を行った。このように、府立大学には、キャップストーンを実際に現場で実施していくうえで、豊富な研究のリソースがあることは大きな特徴である。もちろん、そのリソースを獲得するための教員の努力は大変である。
- このキャップストーンは京都府職員研修・研究支援センターとの連携で、「大学協働ゼミ」に位置付けられており、京都府職員が研修の扱いで授業の受講が出るため、院生たちにとっては大変刺激になることも一つの特徴である。
- また、府職員に加え、毎年とは言えないが、近年では、学内シンクタンクである京都地域未来創造センターの研究員の参加もできており、色々な経験を持った人々との協働で授業が成り立っている。こうした協働による課題解決のスタイルが特徴である。
- ACTRがあることと、学内シンクタンク京都地域未来創造センターがあることで、様々な地域、分野の課題をテーマにできる土壌があり、多様なキャップストーンの展開を行うことが可能となっている。
- 当然のことながら、過去7年間のすべての地域課題は、何らかの形で地域の自治体のトップや、市町村職員、地域住民、商店街などの構成メンバーなどに対して報告会を行っており、研究成果の地域への還元を心掛けている。

1 キャップストーンプログラムの目的・教育目標・学習アウトカム

1-1-I. 目的・教育目標

本プログラムの目的は、本学等で地域公共政策士育成のための教育訓練プログラムを履修済みの学習者が、過去に履修したプログラムで習得した知識・技法・職務遂行能力を活用し、また市民、自治体職員、NPO等との協働による作業を通じて、地域から寄せられたまちづくり、地域づくりの課題解決に当たり、課題解決に向けた提案を行うことである。

1-1-II. 資格教育プログラムの学習アウトカム

達成目標	7-0-3 地域社会における様々な課題に対応するために必要な知識・技能・実践方法に習熟するとともに、それらが地域社会に与える影響を適切に判断することができる。
知識	7-1-3 様々な理論・政策・情報を組み合わせた客観的な分析と評価による既存の概念の修正を理解することができる。
技能	7-2-2 問題の解決に必要な様々な方策や技術及び知見の特定と、それらの組み合わせ・最適化・実践
職務遂行能力	7-3-3 課題の解決のために必要な社会的資源を必要に応じて再構成することができる。

1-1-III. 資格教育プログラムで育成する人材像

本プログラムで育成していく人材像については、地域社会において遭遇する様々な課題に柔軟に対応でき、その対応に必要な知識・技能・実践方法に習熟している人材である。また、そうした対応が、地域社会に与える影響を適切に判断できる人材である。

そのために、知識面では既存の概念にとらわれず、様々な理論・政策・情報を組み合わせた評価ができ、その評価に基づいて既存の概念の修正を理解できる人材であることが求められる。

また、技能面では、地域の問題解決に必要な様々な方策や、技術及び知見の特定と、それらの組み合わせや最適化と実践していく能力を持つ人材である。

さらには、地域の諸問題の解決のために必要な社会的資源を必要に応じて、再構成する能力を持った人材である。

1-1-IV. プログラムの広報

プログラムの広報は、修士に入学してすぐの履修説明会の際に、広報している。そのほかに、折に触れ、プログラムの広報を行っている。とりわけキャップストーンについては、履修説明会にとどまらず、新入生の歓迎会などの席上で受講を呼び掛けている。

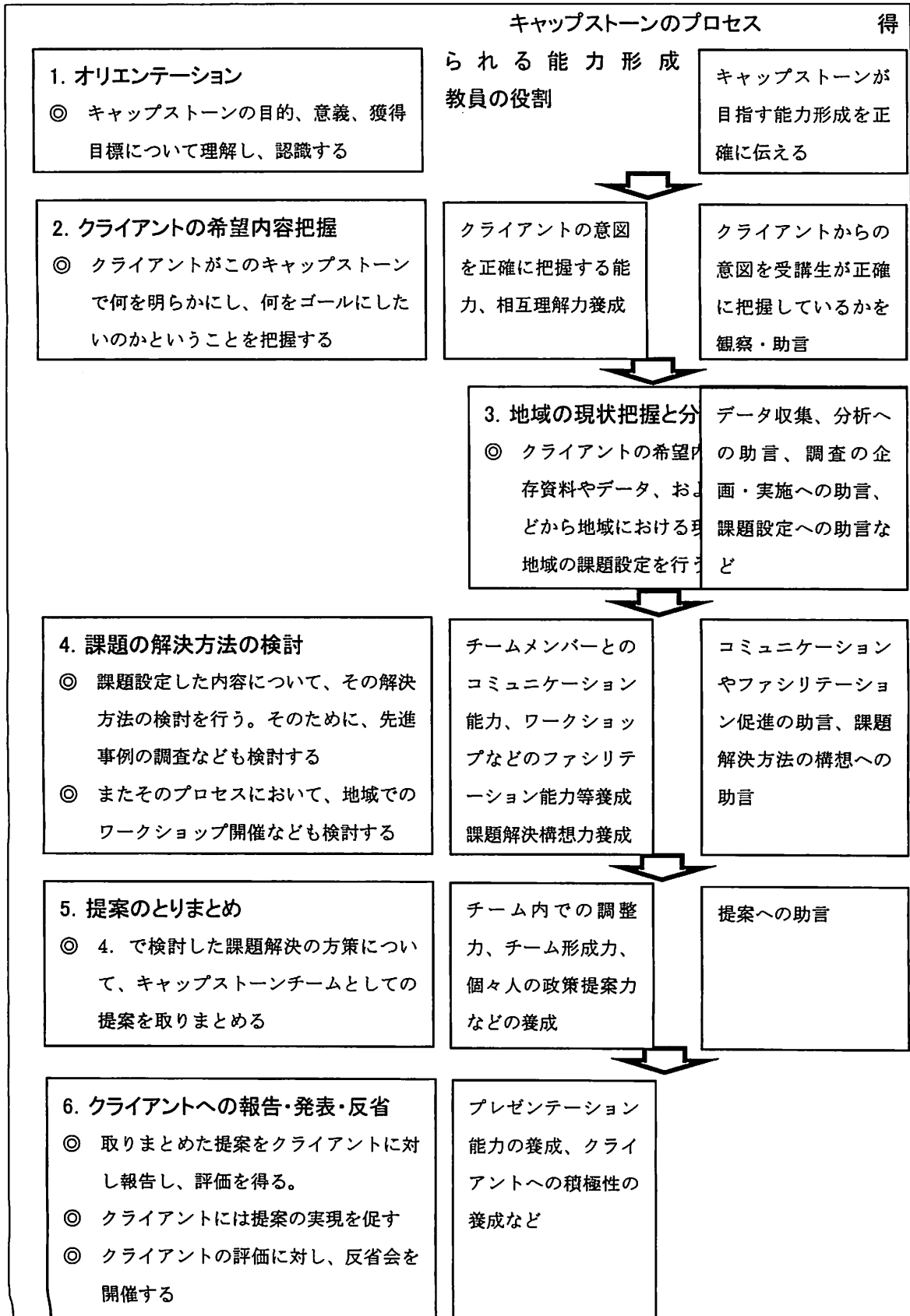
2 資格教育プログラムの内容

2-1-1. 資格教育プログラムに設置する科目

構成科目名		担当者名	ポイント	履修時間	開講時期	プログラム内における構成科目の位置づけ
例	例) 地域公共政策士論	公共 太郎	2		前期・後期・通年 集中・不定期・その他	地域公共政策士として必要な公共性を理解し、自治体政策の中で実践する。
1	キャップストーン	青山公三	8		前期・後期・ 通年 集中・不定期・その他	大学院で学んだ様々な知識、技能、実践力を現実の課題の中で応用・実践する。
2					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
3					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
4					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
5					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
6					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
7					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
8					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
9					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	
10					前期・後期・通年 集中・不定期・その他	

*表の行が不足する場合は、改行して行を加えて下さい。*構成科目の内容が確認できるシラバス等を添付資料として提出して下さい。*開講時期の前期は4月～8月、後期は9月～2月に開催される期間を想定しますが、それに準ずる定義がある場合は、プログラム実施機関の定義に従って選択して下さい。*開講時期がその他の場合は、選択肢を削除してうえで、開講頻度、実施時期などを具体的に記述して下さい。*申請年度以後に科目名称の変更や追加が明らかとなっている場合は、「プログラム内における構成科目の位置づけ」欄にその説明も含めて記載して下さい。

2-1-II. キャップストーン的设计



【図の説明】

1. オリエンテーション

キャップストーンは、あくまでも教員主導ではなく、院生主導のプログラムである。最初にそのことを院生にしっかりと認識させ、受け身ではなく、院生自身が主体的に進める必要があるということを自覚してもらうことが重要である。

2. クライアントの希望内容把握

そして、キャップストーンが対象とするクライアントの希望内容、要望をしっかりと確認し、何が求められているかを明確にすることが必要である。このプロセスでは、クライアントの意図を正確に把握する能力や、相互に理解する能力が養われる。

3. 地域の現状把握と分析・課題設定

クライアントの話を聞いた上で、どのような資料・データを集め、どのように分析し、何を明らかにするのか、また新たな調査は必要かどうかなどの検討を経て、資料収集、データ収集を行い、また新たな調査を実施する場合には調査をし、それらの分析を行う。また、分析を行ったうえで、課題設定を行う。このプロセスでは、資料やデータの収集能力と分析力を養うとともに、必要な新たな調査の企画力の養成にも役立つ。さらにはそれらの分析を通じて、課題設定能力が養われる。また当然ながら、このプロセスで、チーム全体としてのコーディネーションが重要であり、コーディネーションの養成に役立つ。

4. 課題の解決方法の検討

次に、設定された課題に対し、それを解決するための具体的な方策を検討する。その検討プロセスにおいては、地域でのワークショップの開催や、先進事例の調査なども踏まえて検討する。検討にあたっては、クライアントも含めたワークショップなどを行うことも重要である。このプロセスにおいては、チームメンバーとのコミュニケーション能力や、ワークショップなどにおけるファシリテーション能力を養うとともに、課題解決に向けての発想力を高めることにもなる。

5. 提案のとりまとめ

検討された課題解決方法を取りまとめ、チームの提案として取りまとめる。このプロセスでは、チーム内での調整力、チーム形成力、政策提案力の養成につながる。

6. クライアントへの報告・発表・反省

最後に、この取りまとめた提案をクライアントに対して報告・発表を行い、できれば、クライアントの反応を踏まえて反省会などを開催する。このプロセスでは、プレゼンテーション能力の養成や、クライアントへの積極的な働きかけ力の養成などにつながる。

2-1-Ⅲ. キャップストーン内容の周知

年度当初の履修説明会で全体像を周知し、第1回目のオリエンテーションの際に詳細を周知している。

2-2. キャップストーンの教育方法

- 1-1-Ⅱで設定した学習アウトカムの達成に向けて各分野の学習アウトカムごとに下記のような教育を実施する。

7-1-3 (知識)

様々な理論・政策・情報を組み合わせた客観的な分析と評価による既存の概念の修正を理解することができる。

- ◎ キャップストーンワークショップの中で、各自が情報を持ち寄り、課題解決の方法について議論する。そこでは様々な理論・政策・情報が提供され、従来の概念を修正するべきであるという認識を持つ場合が多くある。そのためには、各回で議論するたびに、事前にテーマ設定と情報収集の分担を決め、学習者全員が情報を持ち寄って議論する。

7-2-2 (技能)

問題の解決に必要な様々な方策や技術及び知見の 特定と、それらの組み合わせ・最適化・実践

- ◎ キャップストーンワークショップでは、社会人院生を含む院生達と、研修で参加する京都府の職員、京都地域未来創造センターの연구원などが情報を持ち寄って参加し、様々な角度からの課題解決の方策が議論される。その中で最適な課題解決の方策を模索する。また、調査やイベント等を必要に応じて開催する。

7-3-3(職務遂行能力)

課題の解決のために必要な社会的資源を必要に応じて再構成することができる。

- ◎ 課題解決のための方策を検討するワークショップでは、異なる分野からの受講生が参加しており、それぞれの分野に関連する社会的資源を組み合わせることが可能である。

- キャップストーンで編成するチームは、各年度の参加メンバー数、取り組むテーマによって異なる。いろいろなケースがあるが、できれば原則3人を最小単位のチームとして形成する。2名の場合もある。クライアントからのテーマが複数あり、かつ参加学習者が5名以上の場合は、例えば3人と2人の2チームで2つのテーマについて実施する場合もある。

対象とする公共活動は大変幅広く、これまで地域の商店街活動、地域のコミュニティバスの可能性、地域における自転車利用の促進方策、地域の生活環境改善方策、観光振興策、公共施設の跡地の利用方策等々、多彩である。クライアントからの依頼があった際に、教員がその公共性については判断する。

2-3. 提言書等のとりまとめ

キャップストーンが対象としたプロジェクトについては、基本的に提案のプレゼンテーションとしてまとめている。当然のことながら、提案は学習者全員のワークショップで検討され、それだけでも広範囲からの意見を踏まえている。チームメンバー以外からの意見は、例えばアンケートやヒアリングを実施して聞いている。先進事例調査などに行って、先方に評価や提案に対するアドバイスを求めることも多い。

2-4. 開講形態

キャップストーンの開講形態は、毎週夕刻の講義時間を確保しているが、現地での調査などが主体になる場合は、不定期の時間帯になる場合もある。これらのことはオリエンテーションの際に明確に周知するとともに、不定期の時間帯になるスケジュールに関しては、受講生と調整してスケジュールを決定する。ごくまれに報告会などで、クライアント先の市長の都合でスケジュールが決定される場合には、一部の受講生が出席できなくなる可能性もごくまれにある。これについては反省会等でフォローする。

3. 学習効果の測定

3-1-I. 成績評価方法と学習者への明示

シラバスにおいて、下記のように成績評価方法を明示している。なお、ここでいう「ワークショップ」はキャップストーンの授業自体が毎回ワークショップで構成され、各回の授業、調査を意味している。

「京都府立大学の院生及び科目等履修生、単位互換を行う協定校等に対して成績評価を行う。成績評価は①ワークショップへの参加度、②ワークショップへの貢献度、③ワークショップの成果、などによって評価する。特に②③の項目においては、大学院で学習した様々な理論・政策・情報を組み合わせた客観的な分析と評価ができているか、問題の解決に必要な様々な方策や知見を組み合わせ、最適な提案ができているか、などの点について注目し、評価する。」

3-1-II. ポイント認定の基準

上記で挙げた成績評価方法に対するポイント認定の基準は下記のとおりである。

① ワークショップへの参加度

基本は授業として実施されるワークショップ、調査、報告会への出席回数で評価する。欠席回数が5回を超える場合、それに代わるワークショップでの貢献などを指導教員が認めない限り、ポイントは与えられない。

② ワークショップへの貢献度

ワークショップへの貢献度を測ることは困難であるが、以下のような観点で評価する。

- a) 毎回のワークショップに関して、学習者が前週に与えられた（分担した）課題に関する資料の提出があるかどうか重要な要素の1つである。
- b) 次のポイントは、自分が分担した課題の報告と、他の学習者の報告に関する質疑応答、ディスカッションへの参加度、発言度などの評価である。
- c) もう一つのポイントは、ワークショップを単なる個人の課題発表の場にするのではなく、チームとしてのディスカッションに導くかが重要であり、チームビルディングにいかに関与したかを評価する。
- d) 最後のポイントは、当該学習者が、ワークショップをどのようにリードし、成果に導く発言、提案をどの程度行ったかを評価する。

③ ワークショップの成果

ワークショップで取りまとめられた成果が、a) 独自性・先進性が担保されているかどうか、b) 科学的・客観的で説得力ある情報が盛り込まれているかどうか、c) 具体的な政策提案として有効な提案となっているか、d) 提案の実現性はどうか、などの観点で優れているかどうかを評価し、ポイント認定する。

3-2. 学習アウトカムを評価する基準と方法

学習アウトカムを評価する基準と方法は以下のように考えている。

7-1-3 (知識)

様々な理論・政策・情報を組み合わせた客観的な分析と評価による既存の概念の修正を理解することができる。

- ◎ キャップストーンのワークショップの中で、各自が情報を持ち寄り、課題解決の方法について議論するが、以下のような基準と方法を用いて評価する。
 - a) 持ち寄った情報がいかに客観的な問題と課題を示す情報であるか。
 - b) その情報がきちんと分析され、そこから問題と課題が導き出され、課題解決の方策を考えるうえで重要な要素となっているかどうか。
 - c) 課題解決の方策が、既存の制度・政策に対し、どのような挑戦をしようとしているか。
 - d) 提案しようとする政策が、これまでの制度・政策に対し、どのような新しい視点を有しているか。

以上を踏まえ、総合的に学習アウトカムの評価を行う。

7-2-2 (技能)

問題の解決に必要な様々な方策や技術及び知見の 特定と、それらの組み合わせ・最適化・実践

- ◎ キャップストーンのワークショップでは、様々な分野の知見や技術などを活用して課題解決の方策が議論され、その中で最適な課題解決の方策を模索する。そのため、技能面では、以下のような基準と方法を用いて評価する。
 - a) 問題解決に必要な技術・知見が活用されたかどうか。
 - b) それらの技術・知見が政策提案に向けてうまく組み合わせて活用されたかどうか。
 - c) 課題解決の方策を検討するに際し、地域でのアンケートやインタビュー、現地での調査などを活用したかどうか
 - d) 課題解決の方策を検討するに際し、他の調査やイベント等を必要に応じて開催したか。

7-3-3(職務遂行能力)

課題の解決のために必要な社会的資源を必要に応じて再構成することができる。

- ◎ 課題解決のための方策を検討するワークショップでは、異なる分野からの受講生が参加しており、それぞれの分野に関連する社会的資源を組み合わせて提案を構成しているかどうかを評価の基準とする。

以上の基準に基づき、プログラムの開始時、中間、終了時にコーディネーターとの意見交換の場（反省会）を設け、学習者たちとの確認を行うようにしている。また学習者たちに別添のようなアンケートを実施し、アウトカムの測定を行う。さらに、クライアントに対する報告会で評価を受けている。

4. 資格教育プログラムの管理・運営体制

4-1. 管理・運営体制

公共政策学部・公共政策学研究科にコーディネイターを置き、キャップストーンを含む地域公共政策士育成のための教育研修プログラムの管理・運営・改善にあたっている。コーディネイターは4名の教員からなり、特定のプログラムの担当ではなく、公共政策学部・公共政策学研究科の地域公共政策士育成のための教育プログラム全体を担当する。

キャップストーンの管理・運営・改善は基本的には科目担当教員の役割であるが、重要な決定については、コーディネイターが協議して案を作成し、研究科会議で決定する。

4-2. 科目内容の点検・改善

4.1で述べたように、基本的には科目担当教員の役割であるが、重要な変更、決定事項については、科目担当教員からの要請に基づき、置かれているコーディネイターが協議し、変更・改善案を作成し、研究科会議で諮り、決定する。

4-3. 学習者からの異議申立

学習者の異議申し立ての窓口はコーディネイターである。現在〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇の4名が就任している。異議申し立てを希望する学習者は、履修中のプログラムが何かに関係なく、希望するコーディネイターに異議申し立てを行うことができる。このことは、ガイダンス資料に明記し、ガイダンスで学習者への周知を図っている。

明文化された印刷物やwebページ等を添付資料として提出して下さい。

5 教員及び講師

5-1 教員及び講師の構成

キャップストーンの講師は、本学でキャップストーン開講以来、担当教員を務めている青山名誉教授が担当する。

5-2 教員・講師の指導能力

教員名	種別	担当科目	評価時使用欄
青山公三		キャップストーン	

※教員ごとに、教員種別、担当科目を記載して下さい。教員種別は下記の第1号～第4号のいずれかを選択して下さい。

* 「種別」欄は、次の定義・名称によって作表して下さい。

第1号教員 教育上または研究上の学位及び業績を有する者

第2号教員 特に優れた知識および経験を有する者

第3号教員 教育指導に必要な資格・技能等を有する者

第4号教員 資格教育プログラムの遂行上特に必要とされる授業の補助を行う者、および教育的役割を担う者